

～2018年10月25日 日本労協新聞より～

ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟 理事長 高見 優

高齢者が生き生きできる社会実現を

高見会長理事、稲月専務が日韓交流・研修ツアーで報告

積極的連携も確認

1993年に世界アルツハイマーデーが制定され、25回を迎えることを記念するとともに、今後高齢化が急激に進むアジア地域で、先進的な取り組みをする日本と韓国が関係をより一層深めるために、AAJとKADが今回のツアーを共催。KADは、日本高齢者生協連合会の事業・運動組織に注目しており、シンポジウムでの報告を求められ、高見会長理事と稲月専務理事が参加しました。シンポジウムだけではなく、認知症の啓発・予防を目的にソウル昌徳宮（チャンドクン、世界遺産）を歩くウォーキングイベント(相合傘歩きゴツキ)、韓国の介護家族・専門職との交流・懇親会も。AAJは「呆け老人をかかえる家族の会」という名称でスタートし、京都に本部があります。

私はAAJの会員(母が認知症)でもあります。高齢協組織内にも、個人的に会員になってその活動に参加していた人がかなりいたと思います。私は鈴木森夫AAJ代表理事と話し合い、今後は組織的にもより積極的に連携を深め、協力し合おうと約束しました。

イニシアティブ組織

学術大会では、「若年性認知症と共に生きる」と「高齢者が主体的に生きる社会に向けて」をテーマに報告と討論。

「若年性認知症と共に生きる」のパートでは、当事者や家族も発言。本人に合わせた取り組み、就労の柔軟な活動、社会参加の実例などが紹介されました。

「高齢者が主体的に生きる社会に向けて」では、高見会長理事が、高齢協の歴史を簡単に説明し、「日韓が連携し、高齢協・協同組合組織を通じて社会的事業と運動を拡大・深化することで、地域社会づくりを進めていこう」と呼びかけました。

稲月専務は、福祉・生きがい・仕事について、高齢協会員の活動をスライドで紹介し、日本の社会保障の推移を漫画で説明。「協同組合とは、希望することやニーズを一緒につくっていく組織だ」と主張しました。

座長はまとめで、稲月専務の報告を聴いて、協同組合とは、地域で自らが主体的に参加していく「イニシアティブ組織」であること、高齢協 = Senior Initiative hand in hand であることを強調しました。

学術大会で、認知症をめぐる両国の研究成果と社会全体の認識、本人と家族の生活を向上させる可能性、高齢者自身による協同組合運動の理念と実践を共有し交流を深めることが両国だけでなく、国際アルツハイマー病協会 A D I 加盟 96 ヶ国、中でもアジア太平洋地域の活動の発展につながります。

高齢者を敬う伝統文化を持つ韓日両国が認知症の人と高齢者が生き活きと生活できる社会の実現に向かって、手を取り合い活動を進めていくことを確認しました。